別記様式第７号（第１３条、第２７条関係）

平成２７年２月８日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長　殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻　氏名　星野元興

学位論文題目

過疎地域における寺院経営の変容と現状―鹿児島県の甑島と種子島の事例を中心に―

(Temples and Change in Depopulated Regions: A Case Study of the Islands of Koshikijima and Tanegashima in Kagoshima prefecture)

論文審査の概要

１．本論文の目的

本研究は、過疎地域における寺院経営の変容と現状を明らかにするために、鹿児島県の甑島と種子島の事例を中心に論じたものである。近年、多くの先行研究で、過疎地域を中心に寺院の経営危機が論じられ、寺院経営の問題点として〈過疎〉〈寺檀制度の限界〉〈高額な布施・葬祭費用〉などが指摘されているが、いずれも寺院経営の危機の指摘は行なうものの、統計として決して多くない廃寺数についての議論は見られない。本研究の目的は、寺院の経営が確かに危機的な状況であるのか、もしそうであるならば原因はどこにあるのかという問題について、下甑島と種子島の事例を中心に解明することにある。

２．本論文の構成

論文全体は、７つの章から構成される。

第１章「問題の所在」では、寺院経営の問題について、特に過疎地域における寺院経営について先行研究をもとに整理し、寺院経営研究の成果と課題を明らかにする。これまでの寺院経営研究の中心は、檀家が減少する中でいかに寺院が維持されていくべきかが議論の中心であったが、全国の寺院の約１割が住職不在である中、そのほとんどが廃寺となることなく維持されている現状について議論されることはなかった。そこで、本論文では、これまでの先行研究において取りあげられることのなかった無住寺院や代務住職寺院を取りあげ、住職不在、つまり経営者が不在の中、どのように寺院が経営され、また維持されているかを明らかにし、また、調査地として鹿児島県の離島を選択する意義についても論じる。

第２章「寺院経営の現状」では、全国的に問題になっている廃寺に焦点をあて、都市部における寺院経営の現状、そして全国的にみて廃寺が多いとされる富山県と広島県の事例より、廃寺の要因が過疎による檀家の減少のみによるものではなく、富山県の「寺中」制

度や広島県の「けきょう」制度の事例から、寺院組織の重層的な構造にその直接的な要因があることを指摘する。

第３章「過疎地域の寺院経営―鹿児島県の事例から―」では、前章で明らかにした寺院経営に対する重層的な寺院組織の影響を避けて、過疎と寺院経営の問題を出来るだけ単純化するために、廃仏毀釈によりすべての寺院が明治以降の設立である鹿児島県の事例を取りあげて、寺院設立の基礎となった講組織の変化と現状、講の代表であった番役と僧籍を有する住職との違いを明らかにすることにより寺院経営者としての住職の役割について論じる。

第4章「代務住職寺院における寺院経営―甑島の事例を中心に―」では、江戸時代より現在に至るまで島民のほとんどが真宗門徒であり、元々は、住職が常駐する寺院であったが、過疎による生活への不安から2度に渡り住職が寺院を離れ、現在では、隣町の住職に代務住職を依頼しながらも経営を続ける下甑島の西楽寺の事例を中心に、代務住職寺院の現状について論じる。

第５章「地域社会と寺院経営―種子島の事例を中心に―」では、明治に入るまで真宗の教えが入ってはいなかった種子島を事例に、甑島からの移住者によって種子島各地で1970年代まで集落毎に営まれていたが、現在ではその多くが廃寺となっている「小寺」に着目し、寺院と地域社会の関係について論じる。

第６章「考察」では、過疎地域においても多くの廃寺を確認できない現状を確認し、その大きな要因として、檀家側のイエ意識の高さを指摘する。しかし、現代では、このイエ意識も、これまでの先祖代々の祖先を対象とした先祖祭祀から、両親や祖父母など、よく知る先祖への先祖祭祀と、その追悼の対象が変化しつつある。このように、イエ意識の希薄化が進み、地域社会が衰退する中においても、「先祖代々の寺院」として檀家や地域住民の手によって護持されている。つまり、寺檀制度の崩壊、地域社会の崩壊、檀家の宗教離れなどから寺院の経営危機が叫ばれながらも、現在も廃寺となる寺院が少ないのは、この遺族が故人を偲ぶ思いがあるからこそであるとして、「思慕」の重要性を指摘する。

第７章「結論」では、現在、廃寺が多く確認される中国地方や北陸地方は「けきょう」や「寺中」という寺院組織内での問題であり、地域社会一般においては問題視されるものではないこと、現在の寺院経営の危機が述べられる理由として、これまで寺檀制度の限界、過疎による地域社会の崩壊、檀家の宗教離れなどが挙げられてきたのに対し、祖先祭祀から供養主義へと形を変えた祭祀の姿があること、さらに、寺院は故人を偲ぶ装置として存在し、また供養主義による祭祀の場として存在し続けていると結論する。

３．本論文の評価

１．評価されるべき点

第一に、先行研究を幅広く渉猟・整理し、従来の研究とは異なる視点で廃寺の研究を明確に位置づけていること、第二に、現地調査による一次資料や現地で入手した各種資料の精度の高さと緻密な議論構成、第三に、寺院経営研究でこれまでほとんど議論されることのなかった「思慕」という概念にたどりついた点が極めて独創的であること、第四に、「廃寺」に関する数少ない体系的かつ先駆的な研究であり、宗教学や人類学の研究分野に新たな知見を提示できた点などが、評価できる。

2．問題点

第一に、「講」や「隠れ念仏」などいくつかの歴史的記述については、歴史的根拠が十分に示されていないこと、第二に、本論文の主題でもある寺院経営と言うときの経営とはどういうことか、寺院経営の危機とは何を指しているのか、過疎化は寺院経営のどこに関係しているのかといった点などについても曖昧さが残ること、第三に、個人的かつ共有された記憶という意味での「思慕」は、社会的問題だけではなくて、宗教的救済観というものも関係しているが、その点も含めて、概念としての議論が十分とは言えないこと、第四に、生業と人の移動と寺院サービスということが今回の事例で問題になってくるが、経済学的用語でいえば、過疎地の寺院の存続は、檀家制度という「地域独占」＝「伝統的市場圏の固定化」があることによって成り立つと言えるが、この点の掘り下げた議論がなされていないといったことが課題として指摘された。

4．総合評価

本論文には、以上のような幾つかの問題点は存在するが、現地での綿密なフィールド調査により得られた精度の高い資料に基づいて緻密な議論が展開されていることから、論文としての独創性を備えており、完成度の高い仕上がりとなっていることと、宗教学や人類学の分野に廃寺の研究という新たな知見を提示し、研究の可能性の幅を広げることができた点は高く評価できる。よって、審査員全員が一致して、博士（学術）の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものであると認定した。

授与する博士学位　　学術

論文審査結果　　(合)・否

審査委員

主査　(氏名) 桑原孝雄　　副査　(氏名) 西村　明

副査　(氏名) 渡辺芳郎　　副査　(氏名)　　印

副査　(氏名) 萩野敦